

放課後の遊びについてのアンケート調査

調査の意義

早稲田大学文学学術院
教授 増山 均

■「放課後子ども教室」に注目する意味

「放課後子どもプラン」は、2007 年度から文部科学省と厚生労働省の連携によって開始された新たな放課後対策事業である。「地域社会の中で、放課後等に子どもたちの安全で健やかな居場所づくりを推進する」ために、厚生労働省管轄の「放課後児童健全育成事業」(学童保育)と文部科学省管轄の「放課後子ども教室推進事業」とを、「一体的あるいは連携して実施する総合的な放課後対策」と規定されている。2 つの事業のうちの一方の「放課後子ども教室」は、2004 年度から 3 年間にわたって文部科学省がとりくんできた「地域子ども教室事業」(委託事業)を廃止して、新たな補助金事業として位置づけられたものである。

従来、放課後の子どもの生活に関しては、「放課後児童健全育成事業」(学童保育)のような、保護を必要とする特定の子どもの施策をのぞくと、子ども自身の選択によって利用できるすべての子どもを対象とする公的施設は、児童福祉法第 40 条にもとづく児童厚生施設(児童館・児童遊園)しか準備されていなかった。しかし、児童館は全国で 4700 箇所、児童遊園は 3600(2007 年度)という設置数であり、利用できる子どもの数には限界があった。近年、市民団体や住民ボランティアの手による居場所づくりの取り組みが広がっているものの、まだその数は少なく、大多数の子どもたちにとっては、塾やおけいの場が放課後の居場所として実質的な機能を担っていたと言ってもよいだろう。

放課後の子どもの安全を脅かす事件の発生とともに、急激な少子化による異年齢での集団遊びの機会の減少、さらにはゲーム機器の普及による遊び文化の変容により、子どもの放課後の生活をめぐる環境は大きな変化を見せている。そうした状況の中で、子どもの放課後生活のあり方と居場所づくりが緊急の社会的課題として浮き上がっている。

子どもの健康な成長にとっては、学習を中心とする学校での生活とともに、仲間同士の遊びを中心とする放課後生活は重要な意味を持っている。放課後生活の充実、学校での学びを支える体験学習の機会としても必要であり、子どもの社会性の発達や人間関係づくりを通じて人間力を身につけるためにも不可欠であると言われている。

「放課後子ども教室」は、上記の課題に応えるとともに、これまで不十分だった「すべての子どもの放課後生活の保障」への公的施策としての新しい試みと言えるものであり、それらが今どのように取り組まれ、子どもたちの人間的成長にとってどのような役割を果たしているのかを明らかにすることは重要な課題である。また、そうした検討の中から「放課後子ども教室」が今後なにを重視し、子どもと直接関わる支援者の姿勢はどうあるべきか、コーディネーターや協力者の役割はなにかを多

面的に検討することが求められている。「放課後子ども教室」への注目には、実践的にも研究的にも今日的意味がある。

■本調査の特徴

本調査は、東京および隣接する4県の中から、「子どもの主体的な遊び」を重視し年間 200 日以上取り組みをしている「放課後子ども教室」を設置している小学校を選び、それぞれの小学校において「放課後子ども教室」を利用している児童のみならず、利用していない児童も含めて全学年・全児童を対象にして、アンケートによる子どもの意識調査を行った。詳しくは次項以降の「調査の概要」と「子どもアンケート調査のまとめ」に示したように、「放課後子ども教室」を利用している子どもと、利用していない子どもの比較を通して、子どもの放課後生活における違いと「放課後子ども教室」利用が子どもの成長に果たす役割と可能性の解明を試みたところに特徴がある。

■関連する調査および研究について

文部科学省の「放課後子ども教室事業」に先立つ「地域子ども教室推進事業」に関する調査研究としては、増山均・齋藤史夫他(2006)「地域子ども教室推進事業の展開と可能性—東京都中野区の事業展開を手がかりに」(日本社会教育学会第 53 回大会論文集)、同(2007)『早稲田教育評論』第 21 巻 1 号がある。2007 年度に開始された「放課後子ども教室」についても、すでにさまざまな調査や研究がなされており、その主たるものを挙げると、次のようなものである。

【実態調査】

文部科学省(2007)「放課後子どもプラン実施状況調査」、文部科学省・厚生労働省の合同調査(2008.6.23)「放課後子どもプラン実施状況調査」のほか、実施自治体での独自の実地調査や参加児童・保護者・支援者へのアンケート調査がなされている。また、日本システム開発研究所(2009)「放課後子ども教室における学習支援の取組に関する実態調査」(2009)などのような民間研究機関による独自のテーマによる調査もなされている。

【研究調査】

研究の分野では、発達心理学や教育心理学の分野から「放課後子ども教室」への注目がなされ、北原靖子他(2008)「小学生による『放課後子ども教室』評価への支援」(日本発達心理学会第 19 回大会論文集)や請川慈大他(2009)「放課後の子どもたちの居場所づくり(2)」(日本教育心理学会第 51 回大会論文集)、蓮見元子(2009)「『地域で子どもを育む』ために、心理学は何ができるか—放課後子ども教室の取り組みをめぐる」(日本教育心理学会第 51 回大会自主シンポジウム)などの研究発表がある。北原靖子・蓮見元子他(2008)「新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査—子ども自身による「放課後子ども教室」評価の支援」『川村学園女子大学研究紀要』(第

19 巻第 1 号)において、我孫子市立第一小学校における「あびっこクラブ」の参加児童を対象に継続的な参与行動観察とヒアリング調査を行うとともに、子どもの生の声を聴き取るための方法の開発など、「放課後子ども教室」の実態と子どもの満足度把握にむけての詳細な検討を試みている。また蓮見元子氏を中心とする研究グループによって「平成 21 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書『放課後子どもプランの実際の運営についての自治体レベルでの評価指標作成等に関する研究』(こども未来財団、2010 年 3 月)がまとめられている。そこには、我孫子市の「放課後子ども教室」とともに、江戸川区(「すすくすくスクール」)および取手市(「放課後子どもクラブ」)へのアンケート調査、および全国で「放課後子ども教室」を実施している自治体および NPO 担当スタッフ(117 名)へのアンケート調査の結果が収録されている。また同研究における「放課後子ども教室参加ボランティア」へのインタビュー記録もまとめられ、「放課後子ども教室」に関する包括的研究が進められている。

建築学の分野からも、安川大地・細田智久(2010)「松江市2小学校における放課後子ども教室の実態調査の分析」『日本建築学会中部支部研究報告集』第 33 巻のように、建物のスペース・設備状況と活動内容の関係の解明が試みられている。

【関連出版物】(著書、雑誌特集を中心に)

「放課後子どもプラン」を扱った出版物としては、『教育委員会月報』第 690 号特集「放課後の子どもの安全で健やかな居場所づくりにむけて—総合的な放課後対策『放課後子どもプラン』の創設について」2007 年 3 月号、第一法規。『月刊厚生労働』第 62 巻3号小特集「放課後等の子どもの安全で健やかな居場所づくりに向けて」2007 年 3 月号、中央法規。『マナビィ』No.70 特集「『放課後子どもプラン』がはじまります」2007 年 4 月号、ぎょうせい。全国学童保育連絡協議会(2007)『よくわかる放課後子どもプラン』ぎょうせい。中山徹・大阪保育研究所・大阪学童保育連絡協議会編(2007)『「放課後子どもプラン」と学童保育』自治体研究社。下浦 忠治(2007)『放課後の居場所を考える—学童保育と「放課後子どもプラン」』岩波書店(岩波ブックレット)。『文部科学時報』No.1585 特集「放課後子どもプランの創設—放課後子ども教室事業について」2008 年 2 月号、ぎょうせい。「アフタースクール」『児童心理』臨時増刊 No.891、2009 年 2 月号、「シンポジウム『放課後子どもプラン』をどう見るか』『子どものしあわせ』No.706、2009 年 12 月号。『文部科学時報』No.1598 第 2 特集「地域の子どもは地域で育てる—放課後子ども教室推進事業」2010 年 3 月号、ぎょうせい、などがある。

また、文部科学省は「放課後子どもプラン」「放課後子ども教室」についての情報と全国的な取り組みを紹介するホームページ(<http://www.houkago-plan.go.jp/>)を開設している。

調査の概要

■ 調査目的

「さわやか福祉財団」は、近年、子どもの人間力(自分で生きていく自助の力と、助けあって生きていく共助の力)が育ちにくなっていることを危惧している。人間力が育ちにくい理由としては、少子化と核家族化の進行によって、子どもの仲間関係や子ども主体の遊びが失われたこと、人々とのかかわりが薄くなっていることに原因があるのではないかと考えられる。

そこで当財団では、早稲田大学文学学術院増山均研究室の協力を得て、子どもの放課後の居場所・遊び場として注目されている「放課後子ども教室」を対象にして、「子ども主体の遊び」が子どもの人間力の育成にむけてどのような役割を果たしているか、またどのような可能性をもっているのかを調査・研究した。

■ 調査対象校選定の基準・調査手法

5 都県(東京都および東京に隣接する 4 県)の中から、「放課後子ども教室」を実施している小学校を各 1 校選定し、合計 5 小学校で、①基礎データシートによる実態把握、②コーディネーターへのインタビュー、③活動場面観察、④全校児童対象の「子どもの遊びについてのアンケート」調査を実施した。

「放課後子ども教室」の選択にあたっては、下記の文部科学省生涯学習政策局長・厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知『「放課後子どもプラン」の推進について』(平成 19 年 3 月 14 日)に示されている基準に相当する内容から、特に小学校内で実施されていることを考慮して選定した。

- ・「放課後子どもプラン」は小学校内で行うことを基本とし、このため、事業計画の策定に当たっては、できる限り余裕教室の利用や小学校敷地内での実施を考慮するものとする。
- また、校庭、体育館、図書室、保健室の使用など、学校諸施設の弾力的な運用を図られたい。

・『「子ども主体の遊び」が子どもの人間力を育む』という仮説から、子ども主体の遊びを積極的に位置づけられていると思われる「放課後子ども教室」を選定し、コーディネーターへのインタビューにおいて、その位置づけを確認した。

■ 調査対象校

埼玉県草加市立高砂小学校	高砂小学校放課後子ども教室ジャンプ！
千葉県我孫子市立我孫子第一小学校	一小あびっ子クラブ
東京都杉並区立杉並第一小学校	放課後子ども教室すぎっ子くらぶ
神奈川県横浜市立瀬ヶ崎小学校	財団法人横浜市青少年育成協会瀬ヶ崎小学校放課後キッズクラブ
山梨県甲府市立羽黒小学校	みんなの居場所「羽黒ほっとサロン」

■ 「子どもの遊びについてのアンケート」調査の概要

(在籍児童数) 2,939 名(詳細 表 1)

(アンケート調査実施日) 2010 年 11 月・12 月(詳細 表 1)

(アンケート回収総数) 2,827 名 (詳細 表 2)

実施校	放課後こども教室	アンケート実施日	性別	第1学 年	第2学 年	第3学 年	第4学 年	第5学 年	第6学 年	合計
草加市立 高砂小学校	ジャンプ！	2010 年 11月9日 ～11月19日	男	68	80	74	89	93	93	497
			女	92	65	83	89	83	101	513
			合計	160	145	157	178	176	194	1,010
我孫子市立 我孫子第一小学校	あびっ子クラブ	2010 年 11月30日 ～12月3日	男	47	48	46	57	55	47	300
			女	42	54	47	46	50	58	297
			合計	89	102	93	103	105	105	597
杉並区立 杉並第一小学校	すぎっ子くらぶ	2010 年 11月14日 ～11月18日	男	48	27	29	32	40	29	205
			女	34	34	37	29	24	32	190
			合計	82	61	66	61	64	61	395
横浜市立 瀬ヶ崎小学校	放課後キッズクラブ	2010 年 11月1日 ～11月5日	男	37	50	45	38	35	46	251
			女	42	31	42	42	38	45	240
			合計	79	81	87	80	73	91	491
甲府市立 羽黒小学校	羽黒ほっとサロン ※第4学年～ 第6学年が参加	2010 年 11月15日 ～11月30日	男	43	43	40	50	34	40	250
			女	28	34	24	40	38	32	196
			合計	71	77	64	90	72	72	446
5校児童数合計				481	466	467	512	490	523	2,939

＜表1 調査対象校・放課後子ども教室名・アンケート調査実施日・調査時在籍児童数＞

調査区分	件数	学年							性別			放課後子ども教室参加		
		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	無回答	男	女	無回答	行っている	行っていない	無回答
合 計	2,827	446	419	448	500	472	499	43	1,429	1,363	35	1,022	1,781	24
	100.0	15.8	14.8	15.8	17.7	16.7	17.7	1.5	50.5	48.2	1.2	36.2	63.0	0.8
高砂小学校	985	148	135	152	174	172	188	16	476	494	15	412	567	6
	100.0	15.0	13.7	15.4	17.7	17.5	19.1	1.6	48.3	50.2	1.5	41.8	57.6	0.6
我孫子第一小学校	583	76	101	90	99	101	102	14	288	281	14	291	287	5
	100.0	13.0	17.3	15.4	17.0	17.3	17.5	2.4	49.4	48.2	2.4	49.9	49.2	0.9
杉並第一小学校	354	80	* 29	65	60	62	57	1	186	168		151	196	7
	100.0	22.6	8.2	18.4	16.9	17.5	16.1	0.3	52.5	47.5	-	42.7	55.4	2.0
瀬ヶ崎小学校	478	74	79	84	78	72	85	6	240	235	3	143	330	5
	100.0	15.5	16.5	17.6	16.3	15.1	17.8	1.3	50.2	49.2	0.6	29.9	69.0	1.0
羽黒小学校	427	68	75	57	89	65	67	6	239	185	3	25	401	1
	100.0	15.9	17.6	13.3	20.8	15.2	15.7	1.4	56.0	43.3	0.7	5.9	93.9	0.2

＜表2 アンケート回答件数・学年・性別・放課後子ども教室参加児童数＞

【アンケート集計にあたって】

● 子どものアンケート記入方法

- ・アンケートは子ども自身が記入することとした。
- ・低学年については教室で教師が質問項目について説明しながら記入するよう配慮を依頼した。

● アンケート集計

- ・アンケート回答を挙手にて行った1学級の回答については、集計から除外した（*）。
- ・参加・不参加は、放課後子ども教室への参加についての本人回答にもとづいて区分した。（正式登録児童数とは異なる）
- ・問3・問4・問6・問11は、指定以上を選択して回答している場合は、子どもたちの意思を反映するため、そのまま集計に算入した。
- ・問10-1で、新しい友だちは「できていない」と回答しながら、問10-2で、できた友だちの種類を答えた場合は、そのまま集計に算入した。

● アンケートの分析に当たって

- ・「放課後子ども教室」参加者と不参加者との回答内容の比較に当たっては、学童保育に近い羽黒小学校の羽黒ほっとサロンを除いて、『放課後子どもプラン』の推進について」に示された内容に近い形態で実施されている、他4小学校の合計で比較した。

子どもアンケート調査のまとめ

東京都および近県の 5 つの小学校における「全校児童アンケート」から明らかになった、現在の子どもの遊びの世界、「放課後子ども教室」の役割、子どもの遊びのために今必要なことは次の諸点です。(5%水準で有意差を検定しました。グラフの数字はパーセントです。)

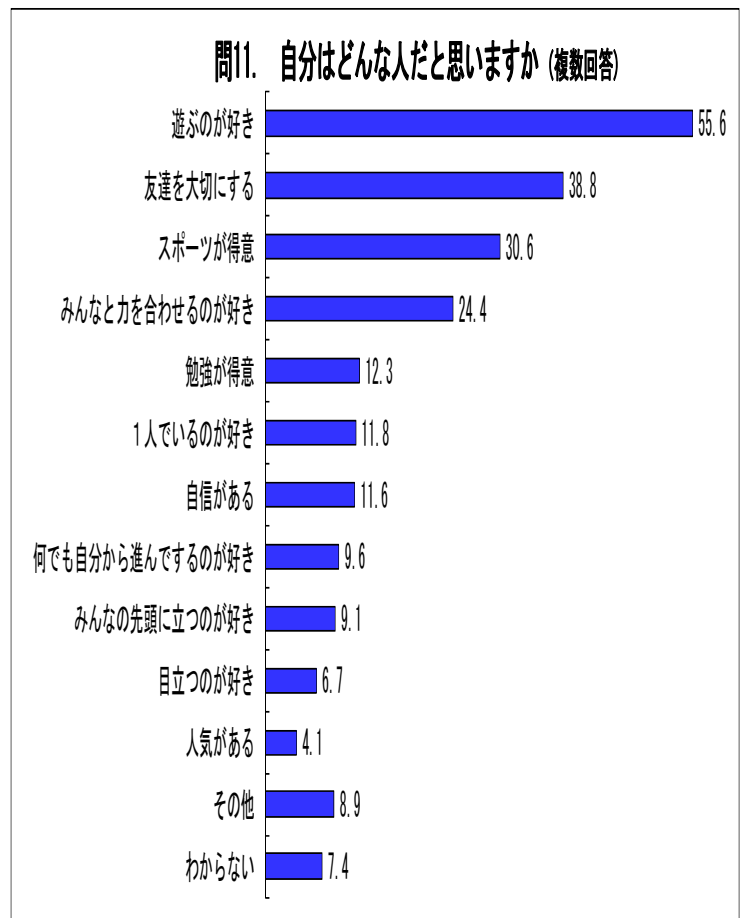
I. 遊ぶのが好き・人気のゲームで遊ぶ ー今の小学生の姿

○自分自身のとらえかた ー遊ぶのが好き・友だちを大切にするー

「自分はどんな人だと思いますか?」という問いに、一番多い回答は「遊ぶのが好き」です。そして、「友だちを大切にする」・「スポーツが得意」・「みんなと力を合わせて何かをするのが好き」、などが上位になっています。遊ぶこと・体を動かすことが好きで、一緒に遊ぶ友だちが大切であるという子どもの思いが見えてきます。

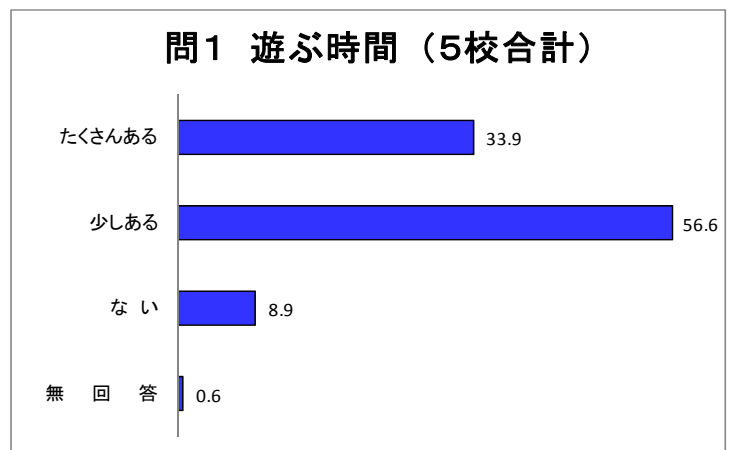
アンケート用紙の「遊ばない」という回答欄の“ば”という字に全部バツをつけ、“べ”に書き換えて「遊べない」としていた子どもがいました。遊ぶことは子どもの強い願いになっています。

また、その一方で、小学校時代であるにもかかわらず、「勉強が得意」が 12.3%、「自分に自信がある」が 11.6%と、ともに少ない回答であることが気になります。



○遊ぶ時間 ー「ない」という子が 8.9%ー

学校が終わってからの遊び時間では、「少しある」という答えが 56.6%です。「たくさんある」という答えは 33.9%です。遊ぶのが好きであるけれど、充分満足するまで遊んでいると思える子どもは全体の 3 分の 1 ということでしょう。遊びが生活の重要な一部である小学生期に、遊ぶ時間が「ない」と答えた子どもも 8.9%います。



○遊びの形 ―遊びの第1位は携帯型ゲーム・近くの公園・家で同級生3～5人で遊ぶ―

子どもたちがよく遊ぶ場所は、「家の近くの公園」・「自分の家」・「友だちの家」が上位です。

その他には、「放課後子ども教室」・「学童保育」・「児童館」・「学校」など社会的に整備された子どものための施設です。

その割合は、整備されている施設の状況によって地域ごとに差があります。

よくする遊びは、第1位が41.0%の「携帯型ゲーム」です。家庭内に設置されている「テレビゲーム」も17.7%になります。

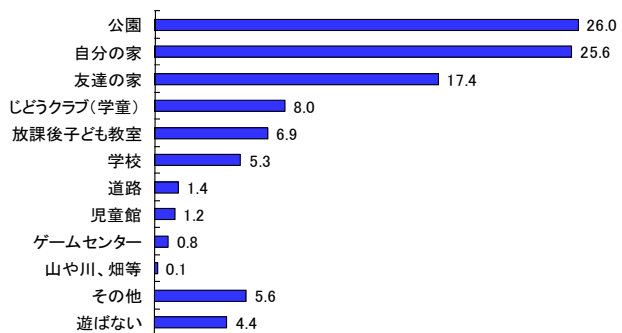
「鬼ごっこ」や「サッカー」などの集団での遊びがそれに続きます。

「読書・漫画」の比率も高くなっています。

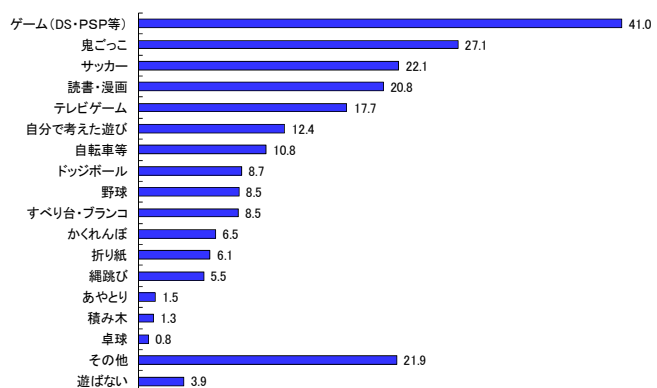
一緒に遊ぶのは「同じ学年の友だち」(80.1%)で、遊ぶ人数は「3～5人」(48.1%)が一番多くなっています。それについて、2人で遊ぶことが多いようです。

近くの公園や家で、同じ学年の友だち3～5人で遊んでいる、というのが、今の子どもの遊びの姿です。

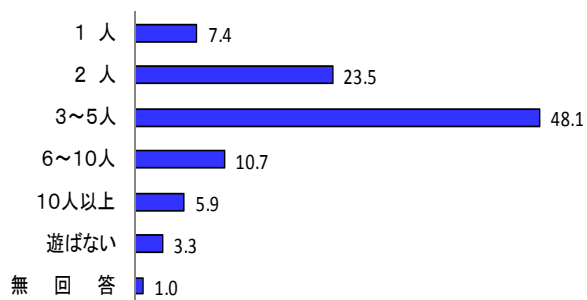
問3. 放課後よく遊ぶ場所（複数回答）



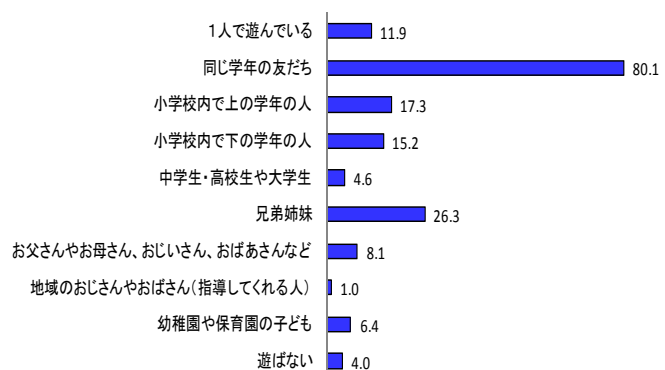
問4. よく遊ぶ場所で、よくする遊び（複数回答）



問5. よく遊ぶ場所で、遊ぶ人数



問6. よく遊ぶ場所で、一緒に遊んでいる人（複数回答）



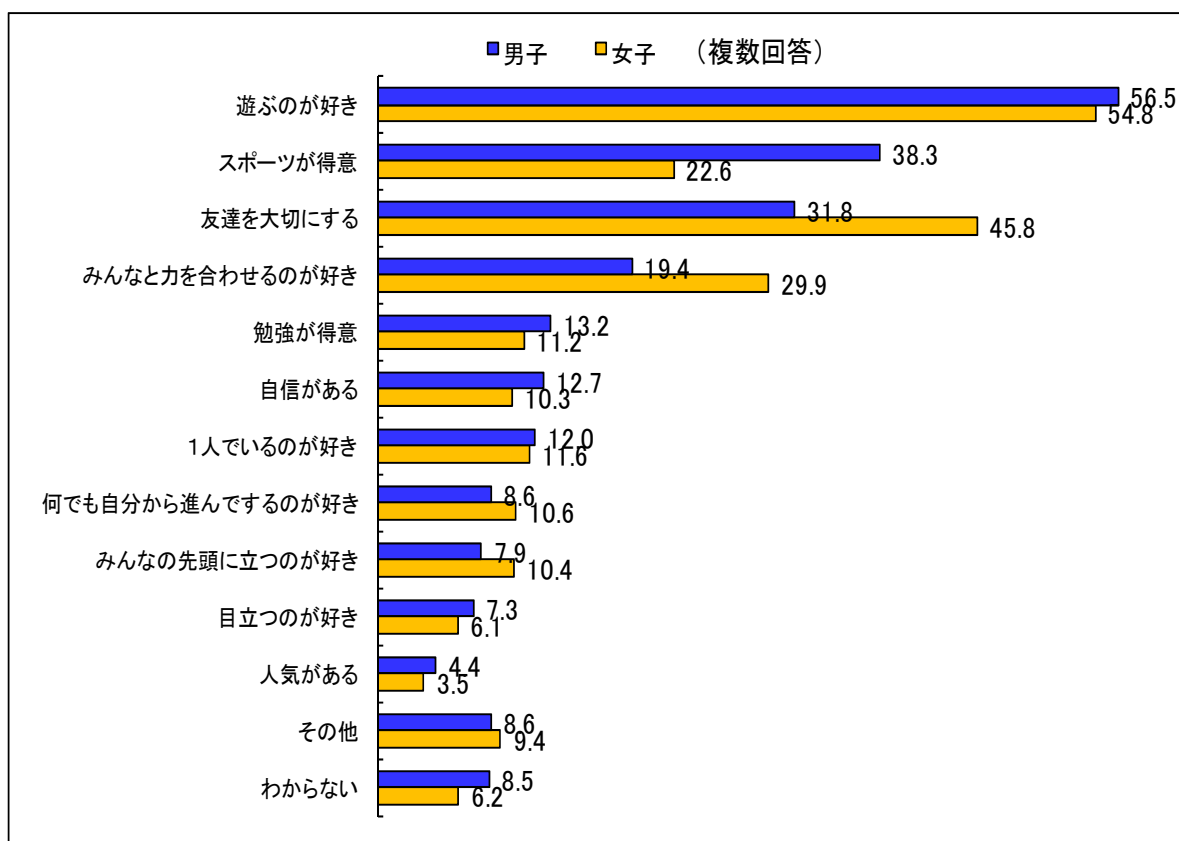
I. ー2 現在の子どもたちの姿ー男の子と女の子の遊びの違い

現在の子どもたちの姿を、男女の違いから見るとどうなるでしょうか。

○自分自身のとらえかた ー友だちを大切にする女の子・スポーツが得意な男の子ー

「遊ぶのが好き」と答える子どもの割合に男女差はほとんどありません。「友だちを大切にする」(男子 31.6%・女子 45.8%)「みんなと力を合わせて何かをするのが好き」(男子 19.4%・女子 29.9%)と答えるのは女の子の方が多く、「スポーツが得意」(男子 38.3%・女子 22.6%)と答えるのは男の子の方が多いという特徴があります。

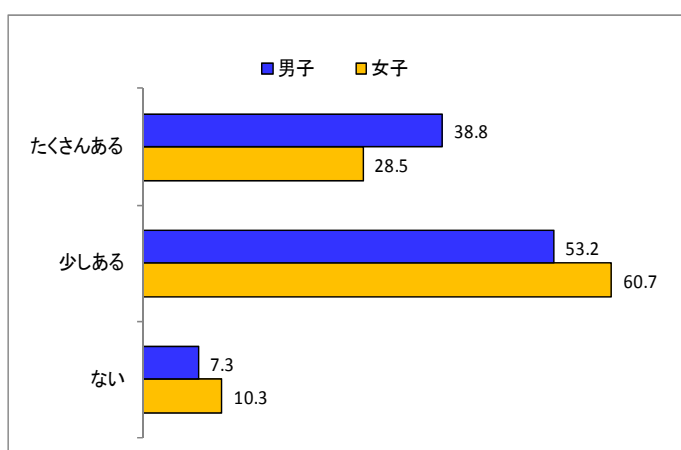
問 11 自分はどんな人だと思いますか(性別)



○遊ぶ時間ー男の子が「たくさんある」ー

遊ぶ時間が「たくさんある」と答えるのは男の方が多く(男子 38.8%・女子 28.5%)、「少しある」(男子 53.2%・女子 60.7%)、「ない」(男子 7.3%・女子 10.3%)という回答には女の子の方が多く答えています。

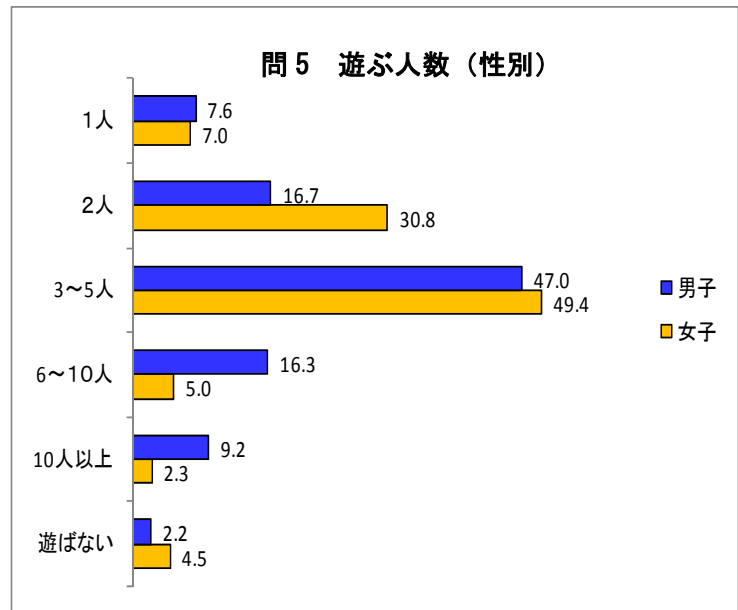
問 1 遊ぶ時間 (性別)



○遊びの姿

ーゲーム・サッカー・大人数(男の子)、 比較的少人数・多様な遊び(女の子)ー

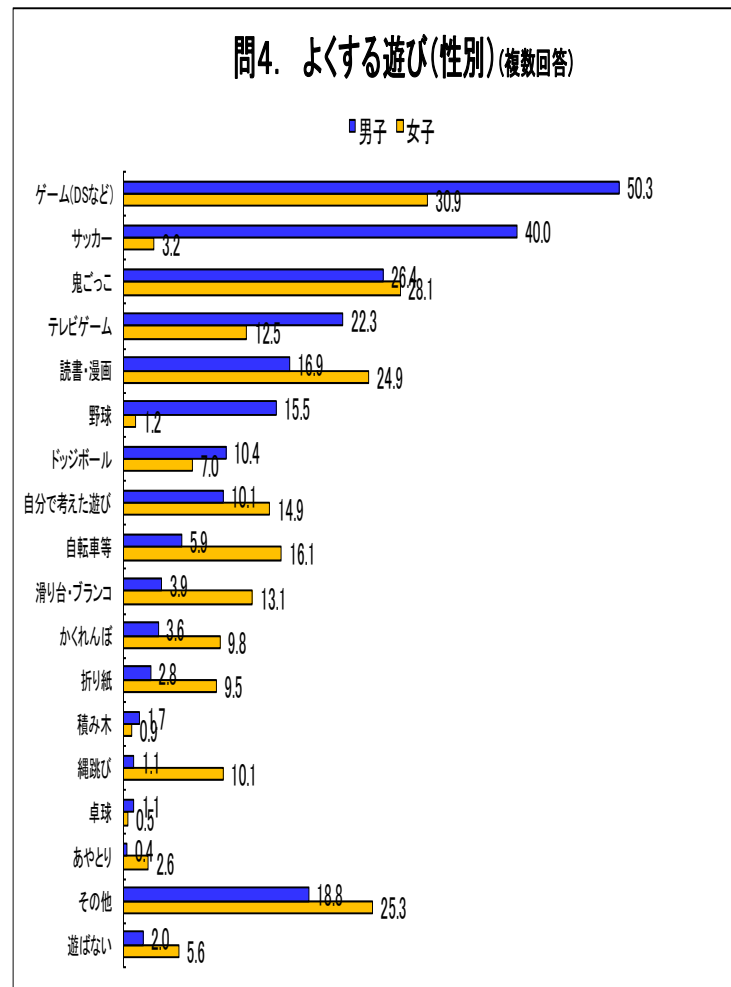
遊ぶ人数は、「6 人以上」と答える割合は男の子の方が多く、「2 人」と答える割合は女の子の方が多くなっています。



遊びの内容では、男女で大きな違いが見られます。男の子は女の子の遊びと比べて、「携帯型ゲーム」（男子 50.3%・女子 30.9%）と「サッカー」・「野球」が特に多くなっています。

男の子の自由記述ではカードゲーム(遊戯王など)が多くあげられています。

女の子でも「携帯型ゲーム」は第 1 位ですが、「読書・漫画」の比率が大きく、「かくれんぼ」・「折り紙」・「自転車等（含一輪車）」・「縄跳び」・「滑り台・ブランコ」などを男の子より多く遊んでおり、その他の自由記述でも「おしゃべり」「人形」「絵を描く」「バスケットボール」「トランプ」などいろいろな遊びをあげています。



I. -3 現在の子どもたちの姿－学年による違い

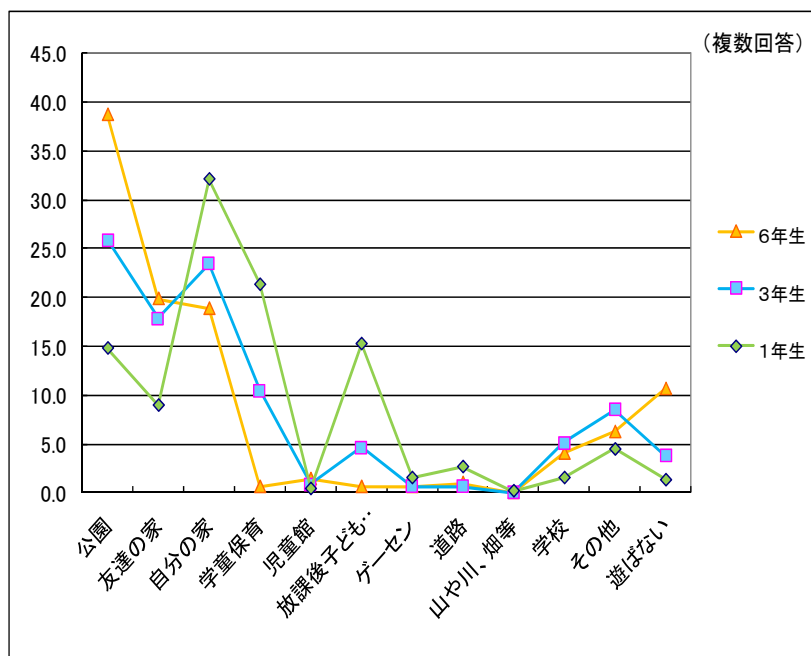
学年によって、子どもの自己認識と遊びの姿は変わるのでしょうか。1～3年生と4～6年生とで比べてみました。

○遊びの姿－高学年になると遊ぶ場所が広がり・遊ぶ人数が増える－

小学校1年生がよく遊ぶ場所の第1位は、「自分の家」です。学年が上がるにつれて「友だちの家」・「公園」が増え、6年生では公園が第1位になります。

学年が上がるにつれて、遊ぶ場所は自宅から、友だちの家・公園へと広がり、遊ぶ人数も増えていきます。

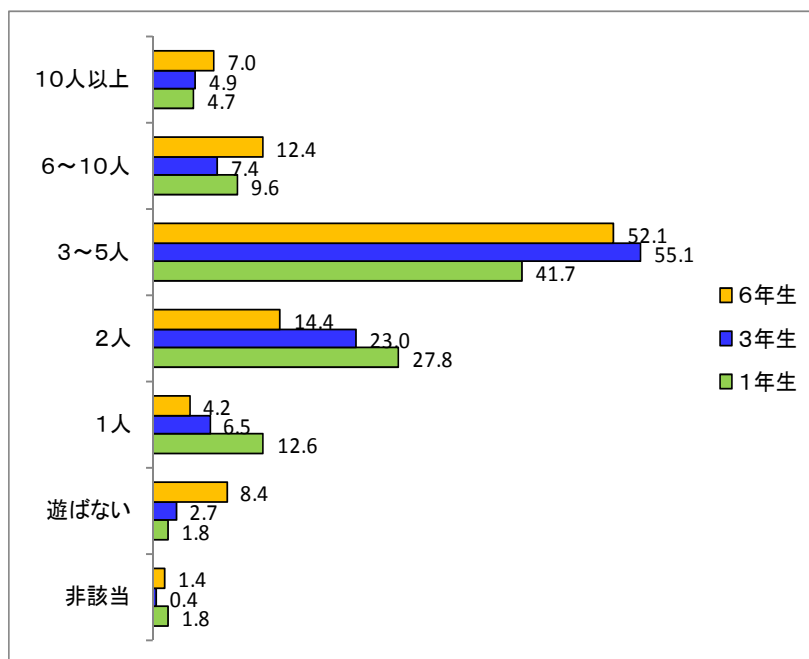
学年による遊ぶ場所の変化（1・3・6年生）



「1人」か「2人」で遊ぶ割合は、1年生では40.4%から、6年生では18.6%へと減ります。

「3人以上」で遊ぶ割合の合計は、1年生では56.0%ですが、6年生は71.5%になります。

学年による遊ぶ人数の変化（1・3・6年生）

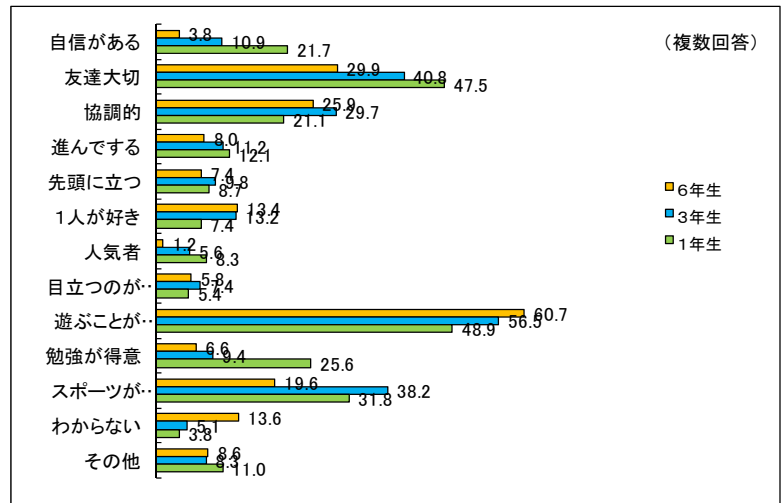


○自分自身のとらえかた

－高学年になると「遊ぶのが好き」が増え、「自信がある」「勉強が得意」が減る－

低学年と比較して、高学年の方が「遊ぶことが好き」という回答が増えています(46.9%→60.7%)。その一方で、低学年でも多いとはいえませんが、「自分に自信がある」(21.7%→3.8%)「勉強が得意」(25.6%→6.6%)と答える子どもは大きく減少します。

学年による自己意識の変化（１・３・６年生）



○遊びの姿－高学年になると携帯型ゲームが増加－

遊ぶ時間が「たくさんある」という回答は高学年になると減少し、「ない」という回答が増加します。

ただし、6年生で回復している点については、今後詳細な分析が求められます。

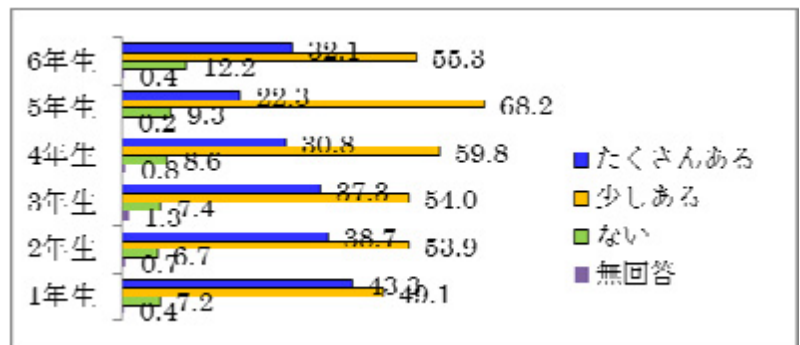
一緒に遊ぶ人は、低学年では、高学年と比較して「兄弟姉妹」の割合が多い傾向にあります。

遊びは、高学年になると「携帯型ゲーム」が増加します。

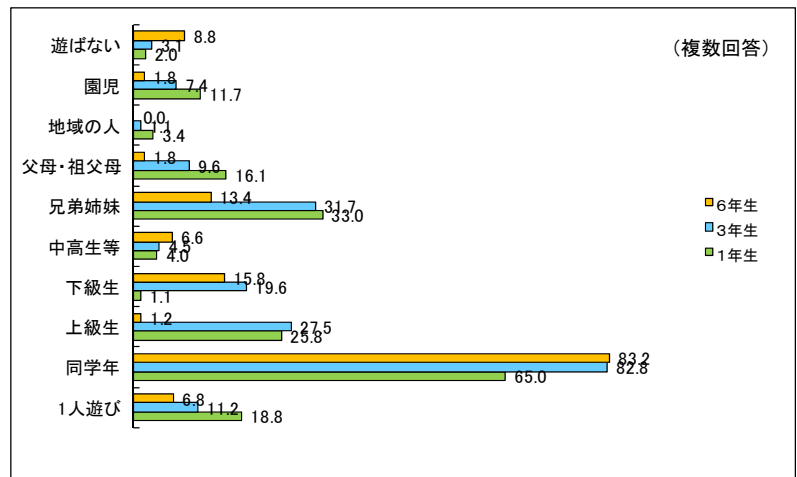
また、遊びの自由記述では、高学年ではカードゲーム(遊戯王など)をあげる子どもが多数います。

「携帯型ゲーム」と「テレビゲーム」をあわせたゲーム機での遊びを学年ごとに詳しく見ると、学年とともに上がっていくその割合が、5年生でピークとなり、6年生で減少しています。

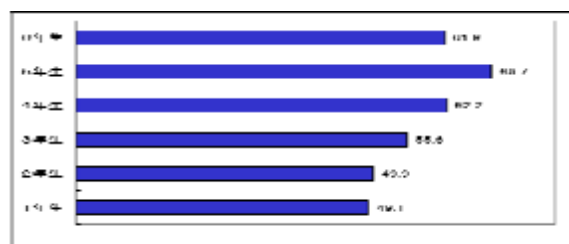
学年による放課後の遊ぶ時間



学年による一緒に遊ぶ人の変化（１・３・６年生）



「携帯型ゲームやTVゲームでよく遊ぶ」回答比率（学年別）



※回答比率は問4－2と問4－3の計を回答者で除した値。

Ⅱ.「放課後子ども教室」はどういうところ

今回調査した5カ所の「放課後子ども教室」のコーディネーターインタビューでは、いずれも「子どもが主体的に遊びをつくることを大切にしている」と答えています。そのような放課後子ども教室に通っている子どもたちは、自分の通う「放課後子ども教室」をどのような場だと考えているのでしょうか。

○自由に遊べる、いろいろな遊びができて楽しいところ

「放課後子ども教室」に参加している子どもを合計した回答として、「自分たちで自由に遊ぶことができて楽しいところ」が66.2%、「いろいろな遊びができて楽しいところ」61.8%と、この2つへの回答が上位になっています。

「楽しくないところ」という回答は、どこも少数です。通っている子どもの多数が、「放課後子ども教室」を自由に遊べ、遊びの種類もいろいろあって、楽しい場所だととらえています。

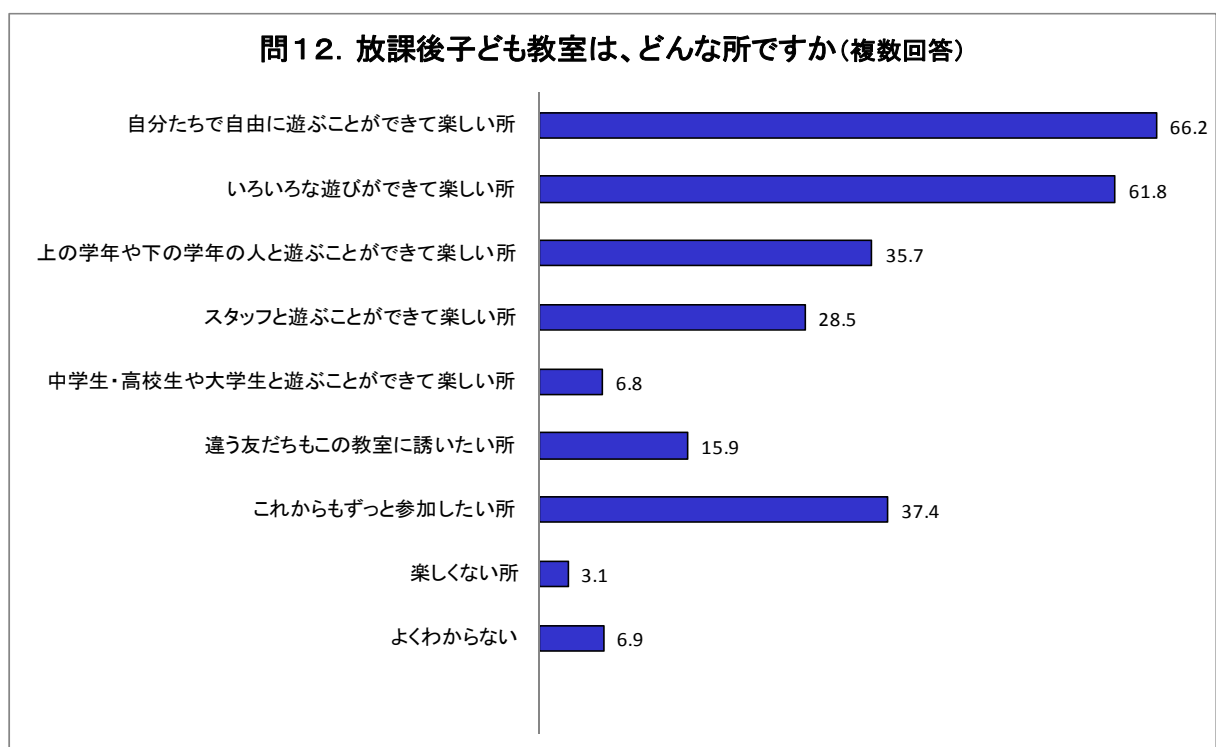
○異年齢の子ども・大人と遊べる

異年齢で遊ぶことができることも、子どもたちの楽しさにつながっています。「上の学年の人や下の学年の人と遊ぶことが楽しい」と答えた子どもは35.7%ですが、「スタッフ（指導してくれる人）と遊ぶことができて楽しいところ」と答えた子どもも28.5%います。大学生・青年がスタッフとして活動しているところもありますが、大人と遊べることも魅力のひとつになっています。

「中高生・大学生」については、場所によって参加している状況が違っていたり、継続して参加したりすることが大変だという状況です。

○これからも参加したい・友だちも誘いたい

「これからもずっと参加したいところ」という答えは37.4%、「違う友だちもこの教室に誘いたいところ」と15.9%が答えています。これらの答えからも、放課後子ども教室が、子どもにとって魅力的な楽しい場となっていることが見てとれます。



Ⅲ. 放課後子ども教室の子どもと遊び(不参加の子どもとの比較)

子どもが主体的に遊びをつくることを大切にしている「放課後子ども教室」に参加している子どもの遊びは、参加していない子どもと比較して見ると、どのような特徴があるのでしょうか。

羽黒ほっとサロンは、高学年の学童保育的位置づけを持ち、全校児童の約 5%の高学年児童が継続的に参加しているという、他の 4 つの放課後子ども教室とは異なる特徴をもっています。そのため、比較は他の 4 校児童の合計で行いました。

○携帯型ゲーム機での遊びの時間が減る、外での遊び・伝承遊び・自分で考えた遊びの割合が多い

遊ぶ内容の特徴は、まず、全体でも個々の放課後子ども教室でも、「携帯型ゲーム機」で遊ぶ子どもの割合が、不参加の子どもと比べて低いことです。(参加 34.4%・不参加 45.0%)

また、放課後子ども教室では、「自転車等」・「滑り台・ブランコ」・「縄跳び」などの外での遊びが多く遊ばれています。

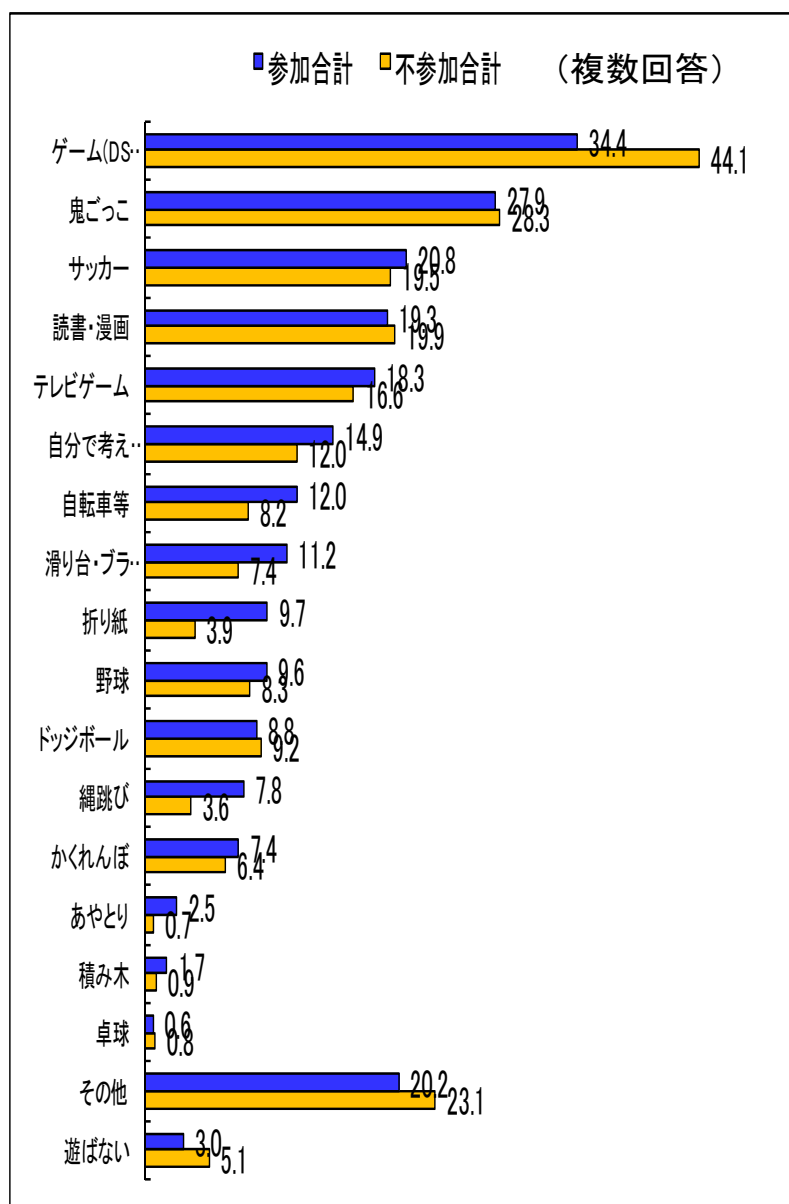
また、「あやとり」や「折り紙」など、伝承されてきた室内での遊びが、多く遊ばれています。

これらの遊びも、今日では自然に子ども同士の間で伝承されず、設定された空間のなかでの遊びのなかでなければ伝わらないと考えられます。

「自分で考えた遊び」についても、参加している子どもの方が多くなっています。

「遊ばない」という子どもは、参加していない子どもの方が多くなっています。

問 4 遊びの種類・放課後子ども教室参加不参加別(4校合計)



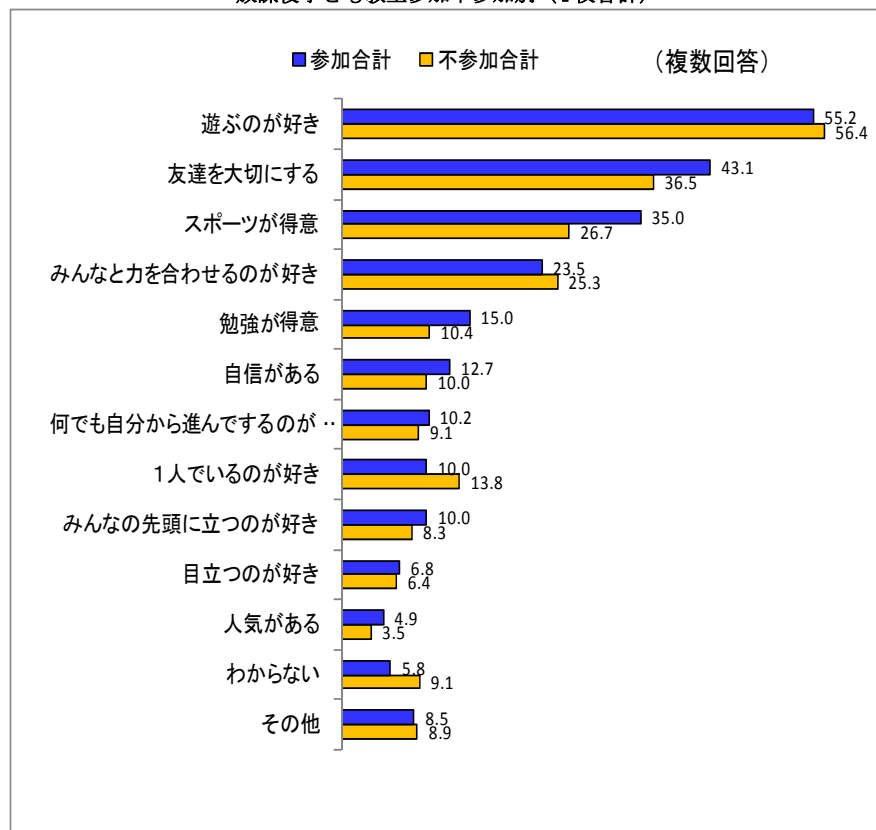
○友だちを大切にする・スポーツが得意・勉強が得意と答える子どもの割合が多い

「自分はどんな人だと思いますか？」という問への答えは、全体の分布の傾向は参加している子どもも、参加していない子どもも同様です。

しかし、参加している子どもでは、自分のことを「友だちを大切にする」「スポーツが得意」「勉強が得意」と考える子どもの割合が高くなっています。

不参加の子どもは、「1人でいるのが好き」「わからない」という回答が多くなっています。

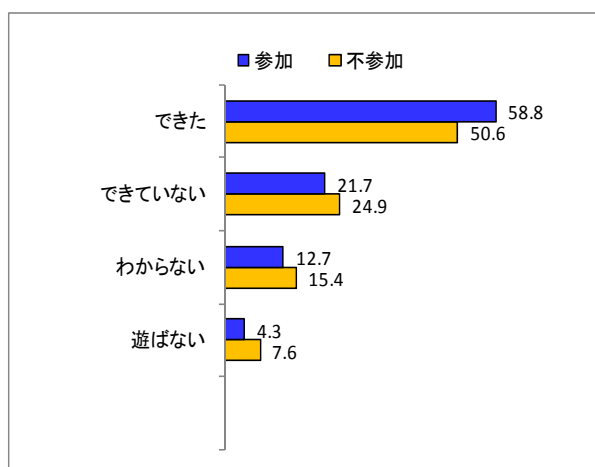
問 11 自分はどんな人だと思うか
放課後子ども教室参加不参加別（4校合計）



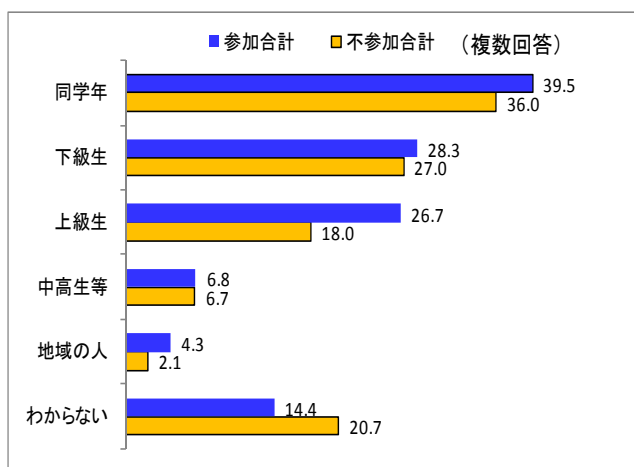
○新しい友だちができる割合が多い

「よく遊ぶ場所で新しい友だちができましたか」という問いには、全部の学校で「放課後子ども教室」に通っている子どもの方が高い回答になっています(1%水準)。新しい友だちは、「上級生」「地域の人」という回答が多くなっています。地域のお大人も「友だち」として考えて回答しています。

問 10-1 新しい友だちはできたか
放課後子ども教室参加不参加別（羽黒小を除く）



問 10-2 新しい友だちはどんな人か
放課後子ども教室参加不参加別（羽黒小を除く）



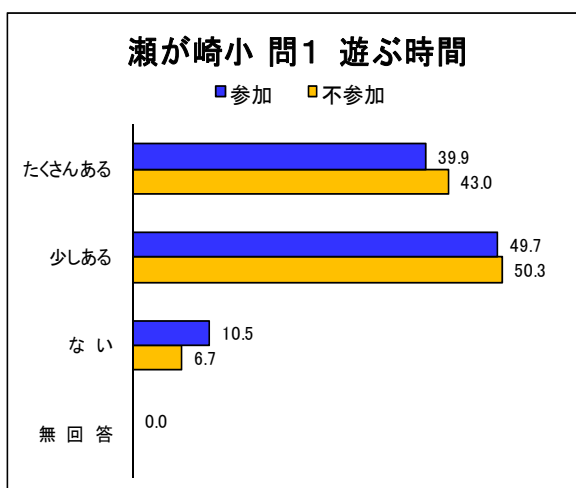
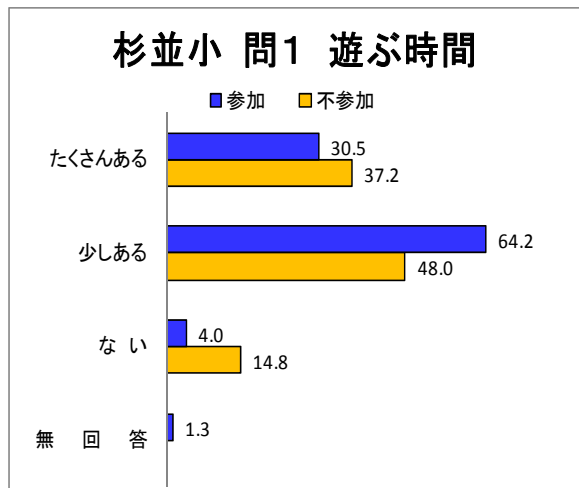
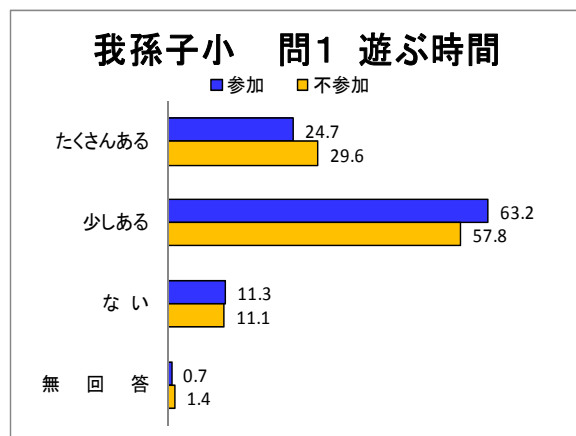
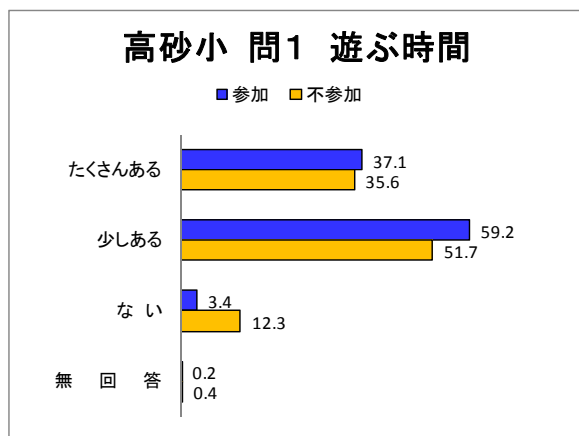
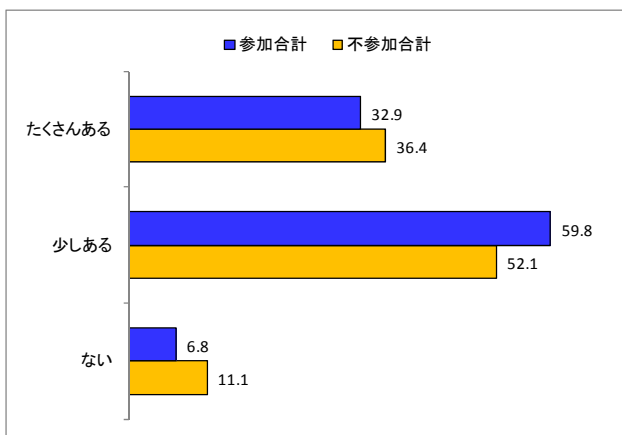
○子どもが考える「遊ぶ時間」の実際

遊ぶ時間が「たくさんある」と答える子どもは、参加している子ども 32.9%・参加していない子ども 36.4%と、参加していない子どもの方がたくさんあると考えています。「少しある」と答える子どもは、参加している子どもの方が多く、「ない」という回答は参加していない子どもの方が多くなっています。

比較した、その他の 3 つの小学校では、遊ぶ時間が「たくさんある」と答える子どもは、放課後子ども教室に参加していない子どもの方が多くなっています。但し学校ごとに見ると、埼玉県草加市立高砂小では参加している子どもの方が多い傾向を示しています。

この回答からは、子どもが考える「遊ぶ時間」のとらえ方について、さらに詳しく検討をすることが求められています。

問 1 遊ぶ時間
放課後子ども教室参加不参加別（4 校合計）



IV. アンケート調査から見える子どもの遊びと「放課後子ども教室」の可能性と課題

■子どもの生活にたっぷりの遊びの時間と年代にあったサポートを

◇子どもは遊ぶのが大好き

「自分はどんな人だと思いますか？」という質問への回答の第1位は、「遊ぶのが好き」です。しかし、「遊ぶ時間がたくさんある」と答える子どもは3分の1にとどまっています。遊ぶのが好きな子どもたちに、子ども時代の生活の柱のひとつでもある遊びの時間を保障することが大事な課題になっています。

◇年齢とともに広がる遊びの世界

低学年の時には、自分の家で、少人数で、遊んでいた子どもは、高学年になると、遊ぶ場所が広がり、遊ぶ人数も増えていきます。

子どもの世界の広がりに見あった、それぞれの年代の必要に応じた遊びの支援のあり方を考えることが求められています。

◇子どもの遊びが携帯型ゲームばかりになる可能性

子どもたちが「よくする遊び」は、第1位が「携帯型ゲーム」です。そして、外で「3～5人」で遊ぶという子どもたちの中にも、よく遊ぶ場所で携帯型ゲームをよくするという答えが少なからずあります。

いつでも、どこでも、子どもの遊びは携帯型ゲーム、ということになる可能性があります。

■「放課後子ども教室」は遊びを通じて＜人間力＞を豊かに育てる可能性を持つ

◇子どもの遊びを豊かにできる

今回調査した、子どもが主体的に遊びをつくることを大切にしている「放課後子ども教室」では、広いスペースで身体を使って集団でする遊びや、室内での伝承遊びをする子どもの割合が増加する傾向にありました。

「放課後子ども教室」は子どもの遊びの内容を豊かにする可能性を持っています。

◇子どもの仲間づくりを励まし人間関係を豊かにできる

これらの「放課後子ども教室」に参加している子どもは、異年齢の友だちや、友だちと思える地域の大人（含むスタッフ）ができ、また、そのことに楽しさを感じていました。

子どもが多様な人とつながる機会をつくる上で「放課後子ども教室」は貴重な場所になっています。

◇子どもの遊びを見守る地域のつながりをつくる

今回調査した「放課後子ども教室」では、地域の大人がスタッフとして参加して、子どもの遊びを積極的に見守っていました。中高生や、地域のお兄さんお姉さんの参加が子どもたちの思い切り遊ぶ姿を引きだしています。

「放課後子ども教室」は、子どもをささえる人のつながりを広げ、子どもの遊びを豊かにする場所になっています。

◇人間力を育てる

今、子どもたちには、自由な遊び時間・広がる子どもの自由空間・多様な人との関係が求められています。「自分に自信がある」と答える子どもの割合が低い中で、遊びの中で自分の力を思い切り発揮することが大切です。人と人とのつながり・関わりから生まれるコミュニケーション能力の形成も課題になっています。

「放課後子ども教室」に参加する子どもは、「友だちを大切にする」・「スポーツが得意」・「勉強が得意」と答える子どもの割合が多くなっています。「放課後子ども教室」は子どもたちに多様な遊びと、多様な人との関わりをつくる場を提供することで、子どもの人間力を育てる可能性を持っています。

■「放課後子ども教室」の課題—子どもが自由に使える遊ぶ時間の保障

◇大人の考える「遊ぶ時間」と子どもの思いのズレ

「放課後子ども教室」に参加している子どもは、いろいろな遊びを自由にできて楽しいところと思っています。一方、参加していない子どもの方が「遊ぶ時間がたくさんある」と答えている学校も複数存在しています。

「放課後子ども教室」では、たくさん遊べるのに、必ずしも遊びの時間がたくさんあると思っていない、そこに大人が整備する活動や施設と子どもが求めている思いとの間でズレが生じている可能性があります。

◇子どもの考える「遊ぶ時間」

子どもは、自分が自由に時間を使って、仲良しの友だちと好きな場所を選んで、好きなことをする時間（時には、何もしないでぶらぶらすることも含めて）としての「遊ぶ時間（自分たちで自由に使える時間）」を求めています。

子どもたちが、「遊ぶ時間」を求めていることを理解したうえで、大人が子どもの思いに寄り添って、子どもの目線で子どもとつきあうこと、活動や場所の整備を進めることが求められます。

■地域全体で子どもの豊かな遊びの空間と時間を保証する

◇地域全体に子どもの世界を広げる

「放課後子ども教室」のあとでは、子どもは地域に帰ります。地域全体が子どもにとって、安全・安心な居場所、遊びを広げる空間、豊かな生活の場所になっているのかどうかという視点を持つことも必要でしょう。

◇「放課後子ども教室」を子どもから主体的に選ばれる場所へ

「放課後子ども教室」が、地域のなかで子どもの豊かな遊び・遊ぶ時間を保障する場として、子どもたちから主体的に選ばれ、「そこに行きたい」と思われる場所へと発展していくことが求められています。

「放課後子ども教室」が持つ可能性を発揮して、地域全体に子どもの世界をひろげる拠点となっていくことが期待されています。